

---

# 『先立つもの達』 ~ 英樹編 ~

双海夏生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『先立つもの達』〜英樹編〜

### 【コード】

N8015N

### 【作者名】

双海夏生

### 【あらすじ】

あいつの命を、病気が持っていた。ちやった。

まだ、中学生だったのに。

葬儀に参列する俺だって、まだ大人になんかなくてない。

でも、男と女の決定的な違いは、このときすでに現れていたんだなあ。

英樹は、中学を卒業する前に死んだ。

いや、卒業式には出席したので、卒業はしている。

しかし英樹は、その半年ほど前から学校へは来ていなかった。

卒業式に来た英樹を見て、クラスメイト達は動揺した。

英樹は直人と同じ野球部で、直人より15センチも背が高く、イチローよりは松井型の、ガツシリとした体格だった。漢字は違うが名前もヒデキだ。

直人とよくキャッチボールをした野球部の英樹は、そこにはいなかった。

薬の副作用で、全身の毛が抜け落ち、身体も一回り以上小さくなって、力なく車椅子に座っていた英樹はまるで別人で、直人も他のクラスメイト同様に、戸惑いを隠せなかった。

直人は、英樹に近づいた。

不自然な間があり、ようやく声をかけた。

「よう、久しぶり。元気か」

「ああ」

英樹はかろうじて笑った。

変わりはてた自分の姿に照れながら。

元気なわけではない。

英樹は自分の命が、もういくらも残されていないことを知っていた。自分と同じ、十五歳の少年が自分の死を悟るといのは、どれほどのことなのか、直人にはわからなかった。

英樹とは一度喧嘩をしたことがある。

直人が陰で、英樹の悪口を言っている。

誰かが言った根も葉もないウソを信じ、直人を待ち伏せ、英樹は襲いかかってきた。

「襲いかかって」きたのだ。本当に。

事態が飲み込めない直人に英樹は興奮して言った。

「お前、俺の悪口言ってんだってな！」

今にも殴られそうだった。英樹は直人の二回りもでかく、腕力でかなわないのは明らかだ。

怒気を含んで放った英樹の言葉に、ようやく自分の置かれた状況を把握して、直人は英樹より二回り大きな声で怒鳴り返した。

「俺がそんなことするわけねーだろっ！　こそこそ待ち伏せなんかしやがって！」

直人がするはずもないことを、誰かに吹き込まれ、あっさりそれを信じたことと、待ち伏せという、姑息な手段で直人を驚かせたことが癪にさわった。

「じゃあ、言っていないんだな」

「当たり前だろ！ ふざけんな。誰からそんなこと聞いたんだ」

「いや、言っていないならいいんだ、すまん……」

直人の迫力に押され、みるみるしおれ、一回りだけ小さくなって、英樹は謝罪した。

単純で、粗野な一面もあったが、素直で憎めないヤツだった。

英樹は死んだ。

卒業式を終えてわずか数日後。

白血病だった。

葬儀は、英樹の家で行われクラス全員が参列した。

英樹は一人っ子で、母を幼い頃に亡くしており、父と祖母に育てられた。

英樹の父は、妻を失い、愛の証として残された一人息子をも奪われてしまった。

なぜ自分が、こんな辛い目に合わなければいけないのか。英樹の父には、もはや神を怨む気力も残ってはいなかった。

これから、この広い家は、英樹の父と祖母の二人暮らしになる。

そこには、深い哀しみも同居するのだ。

「最後のお別れです」

棺の蓋が外された。

死んだ人間をみるのは、初めてだった。

それが親戚のじいさん、ばあさんでなく、英樹だとは……

覗き込むと、英樹がいた。

もう、苦しまなくて済むことに、ほっとしていた。

男子は何かをこらえ、女子は慟哭した。

直人はふと、明美ちゃんが気になった。明美ちゃんは英樹のことが好きだった。

見てはいけないと思ったが、見ないわけにもいかなかった。

案の定、滂沱と嗚咽でひきつっている。

やはり見ない方がよかった。

棺は閉じられた。

みんなで代わるがわる、棺を担ぎ埋葬される場所まで歩いた。

いまでは珍しいが、英樹は土葬された。

あらかじめ掘られていた穴に、その棺はピタリと納まった。

土をかけるとき、直人は自分が英樹を殺してしまうような気がした。

直人は初めて身近に死を感じ、言いようのない喪失感に憔悴した。

埋葬が済み、英樹の家に戻ると、近所のおばちゃん達が用意したのであるう、お茶やジュース、菓子などがテーブルに並べられていた。

「さ、召し上がって」英樹のおばあちゃんが、孫の同級生達をうながした。

みんな憔悴しきっていて、テーブルに並べられたものには、誰も手をつけなかった。……男子は。

え？ 女子は？

女子は盛んに、饅頭や菓子を頬張り、ジュースや茶を飲み、なかには談笑まで……

お前らさつき、あんなに泣いてたろう！ と、直人は心の中でツツこんだ。

さすがに明美ちゃんは、と 思いきや他の女子達と一緒にニコニコしている。

どうなってるんだ？ 直人には理解不能だった。

その光景は、直人にはとても異様に映った。

英樹があっちに行つてから、三十年が経った。

いまでも英樹の顔はもちろん、仕草や声も鮮明に思い出すことができる。

三十年経って、英樹はあの声で語りかけてきた。

「なあ、直人。女って切り替えが早かっただろ。だけどさ、あれで

いいんだよ。悲しみや苦しみを、涙と一緒に思いっきり出しちゃって、楽になって、前を向けばいいんだよ。女は強いよ。男はダメだね、ウジウジしちゃってさ。せっかく出した饅頭、誰も喰わネエんだもん。勉強になっただろ。これであの時の借りは返したよな」

(後書き)

筆者の實在した友達です。

なにかに残しておきたくて綴りました。

タイトルでわかりますが、先立った友人、知人について、また書くつもりです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8015n/>

---

『先立つもの達』～英樹編～

2010年10月10日17時25分発行